

街道とまちづくり

第37回

下田街道

豊かな自然と歴史を活かした 下田のまちづくり

はじめに

下田市は、静岡県の南東部、伊豆半島の南部東側に位置している。天城山系から続く急峻な山々と約47kmに及ぶ海岸線は、下田を特徴付ける美しい景観を形成している。特に海上からは、緑豊かな起伏に富んだ地形や海に突き出した岬、岩の小島などに演出される下田固有の風景を見ることができ、古来よりこの入江を活かして、港町が形成され、幕末の時代には日米和親条約により下田が開港場となった。毎年5月には、下



毎年5月に開催される黒船祭(公式パレード)

田開港を記念して、日米交流の黒船祭が開かれ、さまざまな催しが行われている。

下田街道の風景

下田街道は、江戸時代に下田路と呼ばれ、天城山を挟んだ北伊豆と南伊豆を結ぶ幹線道路であった。下田街道の成立時期を断定することは難しいが、下田が南伊豆の中心として成立してくる室町時代以降に形成されたものと考えられる。

下田街道の経路は、『すしゅうしきこう豆州志稿』によると東海道三島宿から始まり、諸村を通過した後、天城山を越え河津の梨本、小鍋峠を越えて下田市内へと入り、稲梓地区を経過し「下田町」と呼ばれる終点の下田地区へと通ずる。川端康成『伊豆の踊子』の「重なり合った

山々や原生林や深い溪谷の秋に見とれながら…」は、下田街道の風景を的確に描写してくれている。

嘉永6年、米国ペリー艦隊が日本に開国を迫った幕末期、日本を含む世界の情勢が大きく変化する時代となつては、幕府要人がこの下田街道を通り、下田において重要な交渉が行われた。また、日本初の領事館である米国領事館が下田市柿崎の玉泉寺に設置され、日米修好通商条約を締結すべく、総領事ハリスはこの下田街道を通り、江戸へ向かった。石川さゆりの『天城越え』で歌われているように、急峻な天城山を越えることがこの街道の最大の難所であった。その天城と並ぶ難所とされていた

しもだ
下田市長(静岡県)

ふくいゆうすけ
福井祐輔





明治・大正・昭和の建造物が混在するペリーロード

のが、小鍋峠（河津町・下田市）である。ハリスの日記には、この小鍋峠のことと思われる記述が残されている。

その後、明治になると、馬車や人力車の普及によって下田街道の利用が増え、昭和30年代以降は、自家用車の普及に伴い、伊豆へ観光に来られる方々に多くご利用いただいている。

伊豆縦貫自動車道と これからのまちづくり

下田街道のように伊豆を縦断する道路は、現代においても大変重要な路線であり、この下田街道と並行するルートで、伊豆縦貫自動車道（以下「縦貫道」と呼ぶ）の建設が国土交通省所管で進んでいる。縦貫道は、沼津市から本市までを結ぶ、東名高速道路と直結した高規格幹線道路である。縦貫道全線開通時には、移動時間の短縮により、「観光滞在時間の増加」、「通勤圏の拡大」等が期待される。本市では、この縦貫道全線開通時を見据えて、「訪れたいまち・暮らしたいまち下田」を目指して、まちづくりを進めている。

下田街道の終点となる旧下田町には、通称ペリーロードと呼ばれている、かつてペリー艦隊が、条約交渉の場となった下田市了仙寺に入場する際に通った道がある。明治・大正・昭和の建築物が混在した特別な空間が広がっていて、近年では、了仙寺、下田公園と並んで観光ルートとなっている。今後は、ペリーロードから続く港エ

リアを、港の風景を活かした心地よい特別な空間となるよう整備し、街道終点の旧下田町がいつまでも活気ある場所であるように、回遊性を高めていく。

また、皆さまに豊かな自然や歴史を、体験を通じて楽しんでいただけでなく、体験プログラム総合案内窓口を開設している。ガイドブックには載っていない、地元の人だからこそ知っている本物の体

一口メモ

下田街道

歴史を変え、文豪を魅了した伊豆の街道

江戸時代の大幹線「東海道」と三嶋大社門前で分かれ、三嶋大社の大鳥居を起点に北条（寺家）大仁・湯ヶ島を通り、唄にも歌われた天城峠を越えて梨本に至り、さらに小鍋峠を越え、箕作・河内を経て港町・下田に至る約70kmの脇街道。

沿線には、北条氏にまつわる歴史が重層する北条の里（伊豆の国市）、修善寺温泉（伊豆市）、街道を旅する人に賞された河津

七滝（河津町）、下田市内には、吉田松陰ゆかりの蓮台寺温泉などもあり、幕末の緊迫した状況下、日本史に名を残す内外の人物が江戸へ往来した重要な道である。



験を味わっていただくことができる。

今後さらに進みゆく縦貫道の整備を促進していくとともに、下田街道、これまで本市が重ねてきた歴史・文化を大切にしながら、人口減対策、観光業の振興を主体とした経済活性化を図り、暮らしたい、訪れたい場所となるよう、下田のまちづくりに着々と取り組んでいきたい。